

猿 橋
小 学 校

瑛 玖 良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

人の役に立つことが自尊心を育てる

校長 澁谷 一男

小雪の舞う朝、同時刻に出勤してきた職員が、「もう、春の雪ですね。」と声を掛けてきた。

『春の雪』 何と優しく、美しい響きだろう。(確か、そんな名の映画があった。原作は三島由紀夫だったか。) ふんわりとした綿のような雪は、積もらずに地面に消えていく。長かった冬もようやく終わりを迎えようとしている。



それにしても今年の雪には苦勞した。車や電車の中で一夜を明かしたというニュースも報じられたが、私も帰宅途中、西新発田駅前の交差点で、立ち往生している車に遭遇した。30cmほどの凍った^{わだち}轍で後輪が浮き、車道を斜めに遮る格好で停車している。脱出の手助けをしようと車を降りると、私のすぐ後ろの車からも二人の若者が降りてきて、手を貸してくれた。無事脱出した県外ナンバーのドライバーは、感謝しきりで、左側車線を徐行しながら我々を見送ってくれた。

何という充実感。こんな小さな「人助け」が、こんなにも人の心を満たしてくれるのだということを改めて感じた出来事だった。大人でさえがそう感じるのだから、子どもの心にはもっと大きく響くに違いない。

自分が必要とされていると感じた時、人の役に立てた時、人は最も充実感を感じ、心の安定が図られるという。自尊心とはこうして育まれていくのだろう。小さなことでよい。自分ができるとよい。人の役に立つこと、人のために何かをすることの経験が子どもの自尊心を高め、心を豊かにしていくのだと思う。

学校教育の場で係や当番活動、委員会活動などがあるのは、そのような理由からだ。家庭での仕事の役割分担（お手伝い）も然りである。

先週行われた「6年生を送る会」。1年生から5年生までの子どもたちは、6年生への感謝の思いを精一杯伝えた。6年生もお礼と期待の気持ちを下級生に託した。互いに相手のためにできることをやろうという子どもたちの思いが伝わってくる、心が温かくなる会だった。子どもたちの顔も満足感に満ちていた。

「人間にとって最も悲しむべきことは、病気でも貧乏でもない。自分はこの世に不要な人間なのだと思いますことだ。」 マザーテレサの言葉である。